

台本置き場。

就鳥 セツ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

声劇用のフリー台本です。

使用の際はリンクと作者名を乗せていただければ事前連絡不要です。

アドリブや性転換等、ご自由に遊んでください。

Sがついているものは2〜5分くらいで終わる、2000文字以下のショートストーリーです。

目次

S ハウスキーパーズ1 ——— 1
見習い魔道士と星の医者。前編。 7

S 姫巫女ヒロイツク〜ダークサイドゲ
ノム〜 広告CM風 ——— 28

S ノセとミケ『赤い実はじけた』
36

柘榴は遠き海に沈む。予告編 ——— 44

S ノセとミケ『名前』 ——— 52

箱入り嬢と幼馴染『お友達』 ——— 60

花、2輪。〜葵と桃〜『お誘い』

73

ちいちゃい妹を看病するお兄ちゃん、
たは看病される妹ちゃん ——— 94
柘榴は遠き海に沈む。〔試作〕 ——— 100

S ハウスキーパーズ1

アール

「助けてチセちゃん!! あ、えと、遅刻してごめんなさい」

チセ

「おはようアールくん。まだ大丈夫だよ、寝坊でもした?」

アール

「してないよ! ねえ、なんでスルーなの! 僕の格好を見て? メイド服じゃん!!」

チセ

「うん? 気づいてるよ、可愛いね」

アール

「う、あ、ありがとう……いやうれしくないけども!」

チセ

「ええ? どうして? 似合ってるよ」

アール

「う、そうとこだよチセちゃん……ねえ、きいてえ!」

チセ

「はいなあに。あ、手は動かしてね。もうすぐ火が通る頃だと思うから鍋見てくれる？」

アール

「はあい。あ、ポトフだ。あのね！だっておかしいじゃんか！ いや、うちの旦那様はいつもおかしいけども！朝起きたらね、僕の給仕服全部メイド服になったの！もうね、びつくりしちゃって、どうしたらいいかわかんないし」

チセ

「うんうん。それでも、遅れないようにちゃんと着てくるから君はいい子だよ。よしよし、えらいねえ」

アール

「もおーチセちゃんはいっつもそうやって！ 流されないからね!!」

チセ

「えー？」

アール

「ん、人參もうちよいかも。……ねえ、チセちゃん」

チセ

「んー？」

アール

「知ってたでしょ」

チセ

「はいアールくん、味見」（ちよつと被せ気味に）

アール

「んあぐ（口に突っ込まれる）…！おいし！ チセちゃん天才！」

チセ

「んふふ。天才でした」

アール

「ふふふ。あつ！もーっ、チーセーちゃんっ！」

チセ

「だめかあ」

アール

「だめだよ！ 誤魔化せるわけないじゃんっ、僕そこまで阿呆じゃないんだけど!!」

チセ

「おかしいな。前は騙されてくれたのに」

アール

「それ、いつの話さ！マフィンに釣られる安い僕は、もういないからね！」

チセ

「そう。こうして人は反抗期を迎えるのね、お姉ちゃんさみしい」

アール

「ひとつとちよつとしか変わらないじゃんか！ あつ、チーセえちゃん！ 話を逸らそうとしてるでしょ！」

チセ

「あらバレちゃった。……黙っててごめんね。知ってたよ、それ発注したの私だもの」

アール

「んえっ」

チセ

「ほら、私たちの給仕服は奥様が中世のフランスを参考に特注されたでしょう。でも最近ね、旦那様がクラシカルメイド服に興味が出たらしくてね。あ、ポトフにそろそろソーセージ入れて、味見て足りなかったらコシヨウで適当に誤魔化してくれる？」

アール

「わかったよ。……旦那様が女性の給仕服をクラシカルメイドにしたくなかったなら、なんでボクが着ることになったのです？」

チセ

「ほら、旦那様が女性従業員の部屋に入って服を漁ってすり替えるのはちよつと色々だね、セクシヤルな問題がね、あるでしょ」

アール

「僕にするのも同じぐらい問題だと思うよ!! セクハラだと思えます!! というか、普通に女中の皆さんに配ればいいじゃん!!」

チセ

「……とても似合ってるよ」

アール

「……(ジト目で睨む)」

チセ

「う、ごめんなさい。私がひらひらフリフリを着たくなかったのと、似合うだろうなと好奇心に負けて君を推薦しました……旦那様がほんとに実行するとは思わなかったけど」

アール

「すいせん」

チセ

「しました」

アール

「なんで、なんでさあ!!」

チセ

「思った通り可愛いよ!! ごめんね!!」

アール

「ちーせーちゃんっ! 嬉しくないよ!! チセちゃんのせいで僕に暫くこの格好で仕事しなきゃいけないようになったんだけど!!」

チセ

「あつあーっお嬢様を起こしに行かなくちや!!じゃ、あとは頼んだ!!」

アール

「あ、逃げた! ってわああっ沸騰しちゆう!!あつあつえとえつと……チセちやああん」

見習い魔道士と星の医者。前編。

リディア

「ソルじい、次は地表の検熱しますよ」

太陽

「あいわかった。だが先生、可愛らしいお客さんが来ているようだ」

リディア

「何かな、今は忙しい……ん？」

ああ、そうか。君は職場体験の子だね。ソル爺、今日は中央区の魔道士見習いの、確か……中等部だったかな。から、見習いが来るって話したの覚えてますか？」

太陽

「うーん、そうだったかなあ。まあいい、かわいい人の子。歓迎しよう。我こそが数多の世界を照らし、熱をもたらす偉大な惑星、ソルムジーク、またの名を太陽、さらにまたの名をラーメス、ソレイユ、あとは……なんじやったか……まあ気軽にソル爺と呼ぶといい」

リディア

「知つての通り、彼は老年の星だからね。人の子が可愛くて仕方ないんだ、数日の間だけれど仲良くしてやつて」

太陽

「うむ、爺とあとでのんびり話そうじゃないか、人の子。よいだろう？先生」

リディア

「もちろん構いませんよ。さて、見習い。知っているだろうが私は、リディア。天体医学者、つまり星の医者をしている。太陽の主治医の魔導師であるから、太陽の魔導師とも呼ばれるね。それでキミは？」

太陽

「ほほおう、虚空世界からの留学生とは珍しい。どの星の子だ。地球？アストールか！！！！ おおなんと、我が友の子ではないか。ほれ、ちこうよれ。じいちゃんに顔を見せてみる」

リディア

「こら、ソル爺急に親戚面しないの。驚いてるでしょう。悪いね、見習い。ソル爺にとつて地球はかわいい近所の子供なんだ。そして太陽系の星で唯一地球が、生命体、即ち子供を持つてるからね。もう君たち地球の子達が可愛くて仕方ないのさ」

太陽

「何を言う先生、我はこの世界のかわいい人の子たちのことも愛しておるぞ。人の子は総じて愛い!!」

リディア

「わかつてますよ。でも、内孫と外孫の違いみたいなのは実際あるでしょう」

太陽

「まあ、確かにな。それで、地球の子。どこの国出身なんだ？日本!! よいな!!! 我はあれが好きだ、竹取物語の絵巻やら、鳥獣戯画!! 古事記なんかも良いな。あれは良いものだ。どうだ、地球の子、爺は最近の流行りものも知っておるのじゃ。お主はどの記述が好きかえ？」

リディア

「うーんソル爺、惜しいです。見習いと語るには少々昔の話題すぎるかと。あなたは体感速度が早いので仕方がないのですが、見習いと話すならざっと1500年くらい先の話題が良いでしょう」

太陽

「そうかあ。月がかぐや姫が帰ってくると思じて毎夜毎夜待ちわびていたのはそんなに前の話だったか。我はつい昨日の事のように覚えているのだがな」

リディア

「もう1000年前のことですよ。そうなんだよ見習い……月はとても無邪気だね。兄の地球から聞かされた竹取物語を真に受けてしまったんだ。あれだ。見習いのところでしょう、サンタクロースを信じて待つ子供に真実を打ち明ける機会を伺う親の気分だったよ」

太陽

「我としては愛くるしいばかりだったがな。して、地球の子。お主は何が好みなの……マンガ?とな」

リディア

「少年漫画が好きなのか。いいね。私も好きだよ。ソル爺の言った鳥獣戯画やら竹取物語もそうだけれど。あの国の想像力は素晴らしいね、学生寮にも置いてあっただろう、私たちは日本の漫画が好きなんだよ。あれらからヒントを得て生まれた魔術式もあるのは知っているかい?」

太陽

「ほほー。近頃の魔法はそうなつとるのか。見習いは勉強熱心なよい子じやな。惑星言語も難しいだろうに、翻訳魔法もなしによく話せておる。謙遜するな、一つの銀河系の言語を習得してるだけで大したものだ。ここには翻訳魔法頼りの職員も多い」

リディア

「ああ、それは十分に誇るべきことだよ。私が君くらいの時は翻訳魔法で手一杯だった。さて、そろそろ。おしゃべりはこのあたりにしようか。本格的なことは明日からだ。彗星の子供たちの健康診断を手伝ってもらおう。今日はこの施設を見て回っておいで、質問があれば何でもするといい。職員にはそう通達されてるからね。ルーカ」

職員

「はい。アストロナースのルーカです。今日一日見習いさんの案内を担当します、先生も仰っていたように、気になることあれば、気軽に聞いてくださいね」

シーン2

リディア

「おはよう、見習い。よく眠れたかい？ 眠そうだね、起きて早々悪いけれどさつそく出かけるよ。箒星たちのふるさと、翠羅流星雲すいらるに行く。君の故郷の太陽系とはかなり遠い、地球人初の到達かもしれないね。昨日も話したけれど、今日は箒星の子供たちの健康診断をするよ。この時期、翠羅流星雲の幼星たちが箒星となつて旅立つ。だから、長い旅立ちの前にメンテナンスをしておくんだ」

ヤツデ

「あつ、先輩おはようございます。それが例の見習いつすか？可愛いっすね」

リディア

「それ言うな。見習い、彼は小児科の天体医学者でヤツデという。今日はヤツデについて回れ。幼星のことなら、私より彼が適任だろう」

ヤツデ

「よろしくなー、見習い君」

リディア

「さて、では早速向かうとしよう、移動魔法陣は使ったことあるか？」

ヤツデ

「だよなー、気にしなくて大丈夫だぜ見習いくん。先輩、今どきは、移動魔法陣なんて歴史の教科書でチラツと出てくるくらいなんすよ。見習い、実技でも扉魔法くらいだろ？」

「……やっぱね。使うのは星詠みと天体医療関係くらいよ」

リディア

「それもそうか。いいか、見習い。私に続いてヤツデと詠唱した後、左足の踵を3回鳴らせ。いくぞ、まずは術士詠唱から『リリル・リディア・シユテルーノ』」

ヤツデ

『メデイル・ヤツデ・アストローレ』

(見習いが唱えてる間)

リディア

『星の子は彼方への旅路を望む』

『銀河を渡りし宇宙そらの方舟はこぶね』

『指針ししんはこの手に』

『指し示す星の元に我はゆかん』

(コツコツコツ……)

(間)

ヤツデ

「あ。気がついた？ 恐らく魔法陣酔いだな。寝心地はどうだったかな？ 俺の膝枕は

高いぞー」

「あはは。そう慌ててて飛び起きなくて大丈夫だって。さほど時間は経ってないし。ど
？ 大丈夫そう？ 気持ち悪いとか、頭痛いとかない？」

「そ。それは良かった。そんじゃ、見習いくん。張り切って行こうぜ、って、ああつと、
その前に。君に翻訳魔法かけなくちゃ。あ。自分でかける？ そんじゃ、任せた」

看護師

「ヤツデ先生、設営終わりました。いつでも開始できます」

ヤツデ

「はいはい、了解。さ、見習いくん行くぜ」

「いい返事だねえ、感心感心。さて、見習いくんに頼むのは身体測定とガス量検査。正常値かどうかの計算は俺の仕事だから、しなくていいぜ。ただ、人間で喩えると3歳くらいだから、ちゃんと子供に接するように、丁寧に、優しくな。お喋りしてなるべく機嫌を損ねないように、ぐずらせんよう頑張つて。話題は何でもいい、無難なのは歳とか行つてみたい場所とか。ま、フォローはナス達がしてくれるから気楽にしてくれ」

看護師

「はい、アストロナスのハンナです。見習いさん、よろしくお願いしますね」

看護師

「では、お待たせしました。どうぞこちらに」

星の子

「はい。せんせ、こんにちは。よろしく、おねがいします。いくつ???んーとね、にまんちやい。つ!! はわあつ、せんせのもつてる、それなあに? キラキラしてきれーね。これで大きさ測るの? あい、いいですよ。きをつけ? はい、ぴしつ。……きをつけ

じようず……ふへ、ふふ。あい、私はいいこなのですし。ん、ガス量？もうちよつと動いちや、め？わかりまちた」

星の子2

「あい、先生こんにちは!! うん、ぼく元気!! 元気なあいさつ偉い？ふふふ。うん？ちよつと動いちやダメなの？分かった!!……おしまい？ ね、ね、先生ぼく何キロメートルだった？おつきくなれたかな？8キロメートル!! やったあー!! あのね、あのね、ぼくね3000年前は6キロメートルだったの!!」

星の子3

「やだやだやだやだやだやだあ、おれそれ嫌いだもん!!! 測らなくていいの!! 測らなくても、おれはどこまでも渡れるほうき星だもん!! ガスいっぱいあるもん!!!」

んえ？ どこに行きたい……？ ふふふ、あのな、おれはスピカに行きたいの!! せんせえ、スピカ知ってるか、青く光るお星様なんだぜ!! え、スピカまでの距離？………しらない。ひ、ひやくおく……う、途中で足りなくなつてひとりぼつちはやだ………わかつたあ、ガス測るう、でもな、でもな、おれね、あれビリッとして冷たいのやなの。ん………やくそく。………びやあああああつうつ、ううつ………せんせのうそつ

きいいいいい。うう……うん、おれがんばった、えらいい。んあつ、まだやめちゃだめ、もつとなでろ!!!ううっ」

看護師

「お疲れ様でした。頑張ったね、えらいねえ。みんなの所にいこつか」

星の子3

「う”ん……」

ヤツデ

「はい、見習いくんお疲れ様」

「あつははは。へにやへにやじゃん。見たたよ。上手じゃん、下の子でもいた?」

「道理で。見習いくん保育士も向いてんじゃねーの。なんてな。冗談だつて、お前が本気なのはわかつてるよ。本気で目指してるやつじゃねえと天体医学なんて学んでられねえよ。覚えること多すぎて青春投げ捨てなきやなれねえもんな」

「なあ、お前。なんで、天体医学なの? あ、いやあ、深い意味は無いんだけど、珍しいなつて。ほら、虚空世界育ち、魔法のないとつから来た奴らつて魔法騎士だとか、白魔道士だとか、派手なものになりたがる奴多いからさ」

「……人として、人類の尻拭いがしたい?? なんだそれ」

看護師

芍薬の星

「おやおや。こんなところまで来てはいけないよ。綺羅星の子達」

星の子4

「なんでなんで？ うえさまはいいのに？」

芍薬の星

「ボクは年長者だからいいのさ。なんて、言っても仕方ないか。ほら。ここは力が強いから流されたら危ないだろう。待っててやるから慌てず、慎重においで。それにしたつて、ヒトに擬態したボクを見つけてくるとは、君たち見る目があるじゃないか」

星の子5

「ふふふ。うえさまは、ぼく達の明るいお星さまだからね。真つ赤にキラキラしてるからすぐに分かるよ。ねー！」

星の子4

「ねー。あつ、そうだ。見てみてうえさま、さつきね。ヒトの子拾ったの」

芍薬の星

「ヒトの子？ ……うわ。嫌なもの拾ってきたね、研修医かな。…君たち、いい子だから元の場所に帰りなさい」

星の子5

「やだ」

星の子4

「なんで、なんで」

芍薬の星

「このヒト、お医者さんの仲間なんだよ。ここにすることがバレたら怒られてしまう。それは嫌だろう?」

星の子4

「うん」

星の子5

「やだあ……」

芍薬の星

「ね。だからそのヒトの子はボクに任せて戻ってしまいなさい。ボクが代わりに怒られておくから。わかったね」

星の子4

「はあい」

星の子5

「わかったあ」

芍薬の星

「ふう。……可愛い子達。あの子達ならどこまでも飛んでゆけるんだろうな。自由に。……気にかけてくれているヒトの子達には悪いけど、正直タイクツ。戻ったらまた50年は保護魔法の中かあ」

「……なあんだ、ヒトの子。気がついていたの。狸寝入りで盗み聞きとはいい趣味じゃないか」

「は、綺麗で見とれてた？ そう、素直な物言いをする子は嫌いじゃないよ。本当、昔からヒトの子達は星を見ることが好きだよ。好きなだけ見てるといいよ、減るものではない。彗星足りえないボクでも、星の役目は果たせると言うことだ」

「なに？ そんな顔して、どうしたの。……ああ、ボクのためにそんな顔をしてもらってるんだね。そう。これだから、ヒトの子は可愛いよね。ね、君。どこまでボクの事を知っているの？」

「……そう。見ての通りボクは、魔力がある。だからこうして、ヒトの姿になって逃げおかせているのだけど。魔力を持った代わりに、ボクは彗星の子として生まれながら燃料となるガスは少なく、そして長径1ーキロオーバーの大型の小惑星だった。分かるだろう？ 大きな彗星が他の星々にとってどれだけ危険か。まあ、そもそもとして、ボクには旅をするだけの燃料も備わってないのだけれど」

「だから、ボクは宇宙を旅する星にはなれない、ただ、明るく光るだけの恒星さ。……君たちを困らせたかった訳じゃないのだけどね。また閉じこもる前に、少し、憧れの星を見たかったんだ。200億光年の先にある青い星を」

「……見えるよ。言つたでしょ、ボクには魔力がある。遠見の瞳の術くらいできるさ……え？ 普通はそこまで遠くを見れない？ そりゃあキミ、星と人とを比べてどうするの。可愛いヒトの子、特別にボクの瞳を分けてあげる。目を閉じて。うん、素直な子は好きだよ」

「さあ、目を開いて、真つ直ぐ先を見てごらん。どう？ 水の惑星と名高い星、アストール。旅を終えた星屑から聞かされた。それはそれはとつても美しい星なんだ、ね、君もそう思うでしょ。え、地球？ アストールが君の故郷!!? なにそれ、羨ましい。ね、ね、どんな所なの。星屑達の話だと、水の他には花という可憐な生命に溢れた星と聞いたよ」

「コンクリートと電気？ そう。太陽つてソルムジークのことだっけ？ へー、彼の光の当たらない半分はイルミネーションになってるんだ。素敵だね。うん、とつても素敵だ。見に、行きたいな。いつか」

「ふふ。優しい子だね君は。でも、ボクを見てそんな悲痛そうな顔しないでおくれよ。星は人を癒す存在なのだから。なにも、ボクは無謀な夢を語ってるわけじゃない。たし

かにボクは、箒星になるには大きすぎる身体と少ない燃料だ。でも、ボクは魔法が使える」

「転移魔法を使えばどこにだって行けるはずなんだ。今は衝突事故を起こさないように、銀河の地図を叩き込んでから、まだ実行できてないだけだね。かならず、ボクは行くよ。銀河を流れることは出来ないけれど、ボクにだって旅はできる筈だ」

「見習いくーん。どこだー……君まで迷子になることはないんだぜー。みーならーいくーん」

「おや、呼んでるね。ボクの話聞いてくれてありがとう。そろそろ戻ろうか。ん？
なあに？」

「変なことを言うねキミ。星に名前なんてないよ、ヒトがたどり着いて、名を記され、人類史に残され、はじめて星に名前が刻まれる」

「え。君が個人で付けてくれるの？ ふーん。どういふことかわかってるのかな？
でもまあ、いいかな。うん、いいよ。君なら。ボクは名前を貰っても、なんて付けてくれるの？」

『芍薬の君』？ シャクヤク？ それは、なにか意味でもあるのかい？」

「ふうん、地球では美しいものを花に例えるんだ、雅だね。……ボクが地球と花が好きだというから考えてくれたの。そう。ふふ、ほんとにヒトの子の考えることはいじらしい

ね、愛らしい。うん、気に入った、ありがとうね」

シーン4

芍薬の星

「やあ、D r. ヤツデ。戻ったよ」

ヤツデ

「うわ、美人……って、ん？ もしかしてお前彗星か!! 見習いくんも一緒じゃん、良かった。ありがとうな。お疲れ様。もーっ、心配したじゃんか。みんな君がふらっと消えるから探し回ったんだぞ」

芍薬の星

「あっははは。ごめんね、戻る前に星を見ておきたかったんだ。ところでドクター、ボクにはもうシャクヤクって名前があるんだ。呼んでくれると嬉しいよ」

ヤツデ

「んえ”っ……」

「……」

「……あの、ダレニモラツタンデスカ」

芍薬の星

「うん、その可愛いヒトの子にだよ」

ヤツデ

「つはあああああああああ!! 無理!!! とても無理!!!!!! やだあ、頭痛い!!!」

圧倒的監督不行届いいいいいい!! 絶対先輩に締められる無理!! ストレスで禿げる

!!!!!!
芍薬の星

「あつははは。愉快愉快。ああ、大丈夫だよ可愛い子。キミは何も悪いことはしてないよ、ねえドクター?」

ヤツデ

「いや、大丈夫じゃないから!!! 確かにわるいことではないけどね????? 見習いくん、絶対

知らないでやったでしょ。まだ、習わないし、契約を許されるほど星に好かれるとかレアケースすぎるもんね!!!」

芍薬の星

「そうかな。憧れの星、アストールの子で、優しい素直な可愛い子が名前付けたいって言うから、いいかなって。そんなもんだよ」

ヤツデ

「よくない!!! なんで?? ねえ、なんで?? そんな猫を拾うような軽いノリでやることじゃないじゃん!! ほんと無理。はあ。ちよつと落ち着け俺……深呼吸……すう、はあ……すう。はあ…………すうつ、はあああああああああああああああああ(クソデカため息で)……しんど」

ヤツデ

「あー、あのね、見習いくん。星の契約者については知っているか?」

ヤツデ

「そう、リディア先輩と夜の魔導師が有名だよね。星に名前を個人的に与えることを許された人間は星と契約する。すると特殊伴侶って言ってるね、親子や番のような絆を結ぶんだ。お互いの魔力を繋ぐから、離れていても意思疎通やお互いの体調がわかるし、契約者は星の魔力を使うことができる」

芍薬の星

「そのかわり。寿命を伸ばすか、死後魂を捧げるかをして星が朽ちるまで傍にいてもらうけどね」

ヤツデ

「シャクヤクさん、そんなにこの子気に入ってるなら無知を許してやってよー。な?」

「ノーカンにしようぜ?」

芍薬の星

「えー。ボクから契約を迫ったならまだしも、名前を先に渡したのはこの子からだよ」

ヤツデ

「デスヨネー。婚姻届差し出してサインさせてからやつば無しはないよなー、知ってたー。……はああ……ん。いいんだ、見習いくん。君は本当に悪くない。俺の監督不行届だから……ほんとにごめんな。ごめんんだけど、見習いくん、腹括るしかねえよ」

芍薬の星

「ふふ。ボクはどちらでもいいからね。ねえ、キミ、ヒトとしての寿命が尽きるまでにどっちがいいか。のんびり決めておいて」

ヤツデ

「あー。退路塞ぐように悪いけど見習いくん、星は一途だし、1000年なんて秒だから。忘れられて無効にはならないと思う。星は基本的にメンヘラかヤンデレだって覚えておいた方がいいよ……オレも責任もってできる限りフォローするから、その、頑張ろうな」

芍薬の星

「やだな、それは番になった時の話でしょ。まったく。この子は可愛いひごたいししょう庇護対象だよ。

あつははは。キミそれなんて顔。大丈夫。少なくとも、ボクからしたら赤ちゃんみたいな子を番にはしないよ」

ヤツデ

「ホントカナー」

芍薬の星

「でも、そうだね。星には性別なんてものは無いし。君が望むなら、王子様にでも、お姫様にでも。ちゃんと迎えに行くから、キミは精一杯生きてあの青い星で待つて。ボクは必ず辿り着くから。君の親でもある惑星だからね、ちゃんとご挨拶しなくちゃ」

「ふふ。応援してくれるんだ。ありがと。それじゃあ。またね、キミ」

ヤツデ

「行っちゃった。ああ、たぶん保護魔法具のところに戻ったんだと思うよ。……はああ、始末書、報告書、学校と保護者さんへの書類、国への申請……やることいっぱいだけえ」
「うん、そうだよなあ。星とのマナーを学び直したくなるよな。ほんと、1人にしてごめんな。お兄さんに任せていいぜ、責任もって叩き込んでやるから」

「頑張ろうなあ。ボチボチ帰るかあ……はああ、見習いくん、俺は帰ったらとりあえず先輩に怒られてくるから、終わったらお兄さんとパンケーキ食べに行こうなあ、もちろん俺のおごり。約束な」

M 風

S 姫巫女ヒロイック～ダークサイドゲノム～ 広告C

イール

愛こそが正義だと彼女達は叫ぶ。

守るものがあるから立つのだと。

まるで愛を知らぬ憐れな生物だというように。

強い光の宿った目でこちらを睨むのだ。

私が破壊する衝動をちんけな言葉などで表したくはないが。

あえて彼女達に合わせた表現をしよう。

貴様らの愛が正義だというならば、私もまた愛ゆえにはたらいっているというのに。

――問。

イール

私の名はイール。

ひと柱の神に愛され祝福を告げ歌う、楽園の碧き泉の名を与えられた天使だ。

――神代の不埒な人間に不覚にも羽をもがれた、間抜けな天使だ。

羽を奪われた天使は神の使いでない。もはやその概念も残らない。姿は似ていれども元よりヒトでは無いのだから、肉体も持たない。

ただ羽を残して消えゆくだけである。

そんな愚かな天使が眠ってか2000年がすぎた。

人類が神を捨て、自分たちで歩き出したことを知っている。

人間どもからの信仰を失ったあの方は、かつての輝きを失っていることも。

それでもあの方は、神を捨てた人間を変わらずに愛して、仕方ないと笑って。

人間共の住まうこの星に、力のがきりイノチを宿しているのだということも。

私は、知っていた。

神

「……良かった、ここにいたんだね」

イール

どれほど時が流れたのだろう。

私が閉じ込められた遺跡に光が差し、聞こえた懐かしい声に心が震えるのを感じた。

ひどく優しいその声を忘れたことなどただの1度もない。

こけた頬、擦り切れた衣、失われた命の輝き。

すっかり変わられてしまったお姿に、無い翼の羽根が抜け落ちるような心地がした。ああ、なんとということだろう。おいたわしや、我が主、我が大御神。おのみかみ

それでもこの星の何よりもうつくしいその目は、変わらずに深い慈愛の色をたたえて。柔く笑みを浮かべていた。

何よりあたたかく、何よりも尊いあの方が私の羽を抱えて迎えにきたのだ。

神

「遅くなったね」

イール

「……私のことなど、人間に羽を奪われるような間抜けな天使など放っておいてよろしかったのに」（感極まって涙を浮かべている）

神

「僕のイール。僕の天使。そんな寂しいことを言わないで。君は怒っていいんだよ。長い間見つけてあげられなくてごめんね」

「君の羽、見つけたんだ。返してあげようね。あの子たちもやんちゃで困るね。でも、どうか許しておやり。怒るなら、ずっと君を迎えに来なかつた薄情な僕にだ」

イール

「そのようなことなど!! いいえつ、貴方様は何より優しく暖かい御方にございます。ずつと、お会いしようございました。どうかこれからも貴方様の思うままにお使いくださう」

神

「……さあ、イール。羽ばたいてごらん。高く飛んで見せておくれ」

イール

「はい、喜んで」

神

「……僕はね、星の引力を知らぬ君の滑空が好きなんだ。やはり、綺麗だね。ああ、良かった。空を謳うように、星と踊る姿をもう一度、見たかったんだ。僕の心残りはないよ」

イール

「つ。そのようなことを仰らないでください。貴方が望むのであれば、私はなんども！」

神

「いいんだ。そんな顔をしないでおくれ。聡い君はもうわかっているのだろうか？」

ヒトはもう、僕を必要としていないみたいだ。僕の役目はきつと終わったんだよ。

彼らは立派に歩いて行ける」

イール

愚かな人間共を愛した、優しい神様。

文字通り死力を尽くして星を回していた、失われた信仰と共に夢、幻へと還る今は儂き御方。

死んだ天使に再び息吹くほどの力など、もう無かったことなど想像に容易い。

悪魔

「水をさして悪いねえ。そろそろ満足したかい？カミサマ」

イール

嗚呼、やはり。

私のことなど、思い上がったヒツジ共のことなど放っておけばよろしかったのに。

神

「ああ、満足だよ。なんでも持つていくといいさ。悪魔殿」

悪魔

「それじゃあ、お代を頂こうか」

神

「僕のイール。はやく天にお帰り。僕はきつと醜いナニカになる。そんな姿を君に見ら

れたくはないんだ。僕からの最後のお願いだよ。

僕のいつとう愛しい子、僕だけの天使。さ、はやくお行き。幸せにね」

悪魔

「取引成立だ。頂くよ、貴方のいつとう尊くうつくしいもの。貴方を神たらしめる『慈愛』を」

神

「こんな神威かむいの残滓ざんしでよろしければ全て差し出そう。あの子の翼にはそれだけの価値があるのだから」

間。

イール

慈愛を失ってしまった私の神様がどうなるかなど想像に容易い。

間。

神だったナニカ

「憎い、憎い。」

あんなに愛してやったのに

あんなに大事にしてやったのに

私を忘れて、のうのうと生き晒している

神の恩恵を、いふ畏怖を忘れ

思いつがった人間どもが憎い!!

嗚呼イール、私のイール

どこに行つていたんだ、私の天使

イール

「はい、私はここにおりますよ。分かつてるおりますとも、私は髪のひとつ房から脚の先まで、この心も全て貴方様のもの。貴方様だけの天使です。お傍におりますとも」

神だったナニカ

「ああ、そうだったね……。私のイール。君も思わないかい。あの思いつがった愚かな人間共には神罰を下すべきだと。……。そういえば。君のうつくしい羽を奪ったこともあつたね」

「ああ、許してなるものか」

イール

「ええ。貴方がお望みならば。

貴方様からの慈愛を甘受するばかりで裏切り捨て、神の座から引きづり落とした。その全てを破壊して参りましょう」

私の名はイール。

ひと柱の神に愛された、この星に破滅を告げ、滅びを歌う天使だ。

もう私にはあの泉の名もこの純白も似合わないかもしれない。

それでも貴方様の心が安まるのなら、私は輝く白を失うことも厭いとわない。

「姫巫女☆ヒロイック、毎週日曜朝8時30分より放送中」

神だったナニカ

「公式ノベル、巫女姫☆ヒロイック、ダークサイドゲノム第3巻は2015年9月31日発売」

「お前らが捨てたんだ、私がお前たちを棄てて何が悪い」

S ノセとミケ『赤い実はじけた』

三池

「次は借り物競争かあ。毎年お題がある意味酷くて『青春クソ野郎晒しあげレース』とも呼ばれるからなあ。犠牲者の皆様南無南無。我々勝ち組はスポドリ片手に低みの見物といきますよ」

「あ。ノセだ。あいつ貧乏くじ引いたんだ。あとで笑ってやる」

「うわ、うるさつ。何の歓声だろ?……ああ。クラスのマドンナがこちらに向かつて来るのか……道理で。誰か呼んでるみたいだけれど、聞き取れないな。マドンナ様のご指名は誰かな……ん、あおい……? 葵って、あれ? 私?……ま?」

「はい桃ちゃん、お探しの三池葵はここにいますよ。桃花ちゃん、私をご指名ですか……ああなるほどね、確かに恋慕う好きな人とは一言も書いてないね。えへへ、私好きな人なのかあ、そっかあ。嬉しいな」

「あつは。ブーイングをどうもありがとう。悪いねえ野郎ども、お姫様は私をご所望だつてさ。百合の間に割って入る男は死罪って相場が決まってるのをご存知ない?」

一ノ瀬

「おつ、ミケみーつけた」

三池

「あ、ノセえ。もしや私をお求めでー？」

一ノ瀬

「こそ、お求めお求め。よつと、かーくほ」

三池

「はっ？ いやちよつと待って、降ろして!! 悪いけど私君と走るとは言っていない!!」

私には桃花ちゃんという先約がだな!!」

一ノ瀬

「ええー？ そうなの。じゃあ二条さん、悪いんだけどさ、ミケは俺に譲ってくれない

？」

三池

「はあ？ 何勝手に!! ええつ桃花ちゃん、私がやだよ！ 私は桃花ちゃんと走りたいもん

!!」

一ノ瀬

「あんがとな、二条さん。そんじゃあ、ミケ。行こつか」

三池

「あつこら!! 離せ!! わかった、行くから!! せめて降ろして!!」

—間。

一ノ瀬

「一緒に走ってくれてどうも。おかげで1等だったよ」

三池

「どういたしまして、私は1メートルたりとも走っちゃいけないけどね。お役に立てて何よりだよ」

一ノ瀬

「いやあ、アンタが敵チームなのに借りられてくれるお人好しで良かった」

三池

「ノセくん。あれは攫ったのほう表現が的確だったとおもうのだけど?」

(抓ねる)

一ノ瀬

「アツ イツツツタツ……おまつ、ちいったア手加減しろ!! はーっつ、痛った……」

三池

「うるさい、それは私が受けた羞恥の痛みだよ。謹んで受ける馬鹿ノ瀬」

一ノ瀬

「……いやあ、ただでも敵チームの三池さんを走らせるのは悪いかなアってね。こう、ひよいとつまみ上げた方がね」

三池

「はあ……何だこの格差は。筋肉か？筋肉なのか？」

一ノ瀬

「いやいやミケさんや、そのちいちゃい体躯とうっすい体じゃあね？」

三池

「殺すぞ。ったく、なんだって降ろしてくれなかったんだよ。ちゃんといてくつて言っただじゃんか。わざわざ辱めるような抱え方しなくても良かったと思うんだけどな。悪意しか感じない」

一ノ瀬

「おや、お姫様抱っこではご不満でしたか？お嬢さん」

三池

「馬鹿にしてんな？ 不満しかないよ。そんなにマブに意地悪して楽しいかクソが」

一ノ瀬

「なんのことやら」

三池

「……こんにやろう」

一ノ瀬

「(ケラケラと笑う)」

三池

「ノセってほんとに性格悪い。性悪だ」

一ノ瀬

「えー、知らなかったんで？」

三池

「悔しいことによく知ってた」

一ノ瀬

「そんな悪友はお嫌いで？」

三池

「うぐ、嫌いじゃないよ馬鹿」

一ノ瀬

「知ってた。ミケはほおんど、俺の事大好きだもんねえ」

三池

「やかまשיやい。はあ……そんで、結局お題はなんだったの」

一ノ瀬

「あー、お題？ んあー……なんだったと思う？」

三池

「ええ……質問に質問で返さないですよ。わからないよ、ノセつてば審判に紙見せたと思つたらすぐに破り捨てたじゃん。実況のマイク奪つて「コイツが1番のダチ」つて宣言してたけどさ……気になる」

一ノ瀬

「ふうん、ミケちゃんそんなに知りたいのー？」

三池

「んえ、何その顔……だつて気になるじゃん」

一ノ瀬

「んー、じゃあ次会う時まで考えといてよ」

三池

「教えてくれんのかいな。いいけど」

一ノ瀬

「ねえ、三池」

三池

「んー？ わ、あえ、なに。……黙らないですよ、気持ち悪いな。何急に、……あ、待って、ち、近いつて……ノセ」

一ノ瀬

「考えといてね。それで次会った時は」

三池

「……」

一ノ瀬

「（耳元で）ちやあんと、自分が獲物だつて自覚しといてくれよ」

三池

「つ!!?は、へ……?」

一ノ瀬

「そんじゃま、午後の競技も程々に頑張れよ」

三池

「ま、待ってノセ!! 一ノ瀬待ってつてば!! 誤解しか生まない言葉を解いてからにして!!! 脳みそ処理落ちしそうなんだけど!」

間。

一ノ瀬

「……ほおんと、鈍感なお間抜けさん。冗談やからかいでんな事言うかよ。ばーか。ただ言うつもり無かったんだけどな。まあ、せいぜい俺のことで頭いっぱいにして眠れなくなりゃいい」

「さアて、どうやって溺れさせようかね」

柘榴は遠き海に沈む。 予告編

春彦

「筋肉か……」

初

「失礼します。春彦さん、珈琲こおひいを淹れました。1度、読み物は置いて、お茶にしませんか」

春彦

「ん、お初。わ。もう一刻も過ぎていたのか。4半刻よんはんこくくらいの気でいたよ……ありがと

うお初、すぐに行くよ」

初

「随分ずいぶんと熱心になっていたようですが、何を読んでらっしゃったのですか」

春彦

「学者様の書いた論文さ。筋肉があつた方が長生きできるそうだよ。僕には逞しい肉がないからなあ。君より早く衰弱死してしまいそうだ」

初

「あら。では婿入りし直してうちの米屋でも継ぎますか、必要に駆られて自然と鍛えら

れますよ」

春彦

「義兄上あにょうえがいらつしやるだろうに。素敵な誘いだけれど僕には荷が重いな」

初

「まあ、残念です。でもあまり早く置いていかれるのは、私は嫌ですよ。ただでも女のほうが長く生きるようにできているのですから」

春彦

「そうだね。僕もあんまり長い間きみが居ないと、柘榴ざくろの実を黄泉よみから持ち出してしま
いそうだ」

初

「柘榴、ですか？」

春彦

「お初、こんな話を知っているかい。西洋に伝わる死者の国。その王の恋物語の話だ」

――間。

春彦

――生者を引き止めるには冥界の4粒の柘榴があれば良かった。

では、死者に会いに行くにはどうしたらいいのだろうか。

「なあ、お初。僕を置いて遠くへと行ってしまった人。

僕は黄泉の柘榴が欲しいよ」

「僕を君の居るところに連れて行っておくれ」

君の在処あつかを求めて、どれくらい経っただろうか。

僕の眼まなこが温度を映さなくなつて暫くしたころだ。

僕は海に来ていた。

晩秋ばんしゅうの砂浜。

素足を撫でる波は、僕をゆるやかに誘っている。きっと凍えるほど冷たいのだろう。けれども、それが分からなくらいに僕はその先へと行きたかった。

僕の視界はいつからか、ぼうつと周りがぼやけるように暗かった。それからだんだんと色が分からなくなつたのだ。代わりに眼まなこが見つめるようになった虚空は、とても遠くて。それはどこまで歩いても届かなくらいの、遙か彼方にあるのだ。

だが僕はそこへ行かねばならない。

目指せど目指せど叶わなかったが、諦めることはできない。

そこへゆけば君に会えると確信していたからだ。

海はそんな僕のすべてを理解しているかのようにとても静かだった。昔、君と来た時。足首にまわりついて遊んでいた無邪気な波は、居なかつた。柔やわく、穏やかに、ただ優

しく、冷たい淵へと招いている。

ああ。この先だ。この虚空の先に君がいる。

ようやくと見つけた。何をしても辿り着けなかった先へ行く道は、海にあったのだ。僕はきみに伝えなければならぬことがあるんだ。

――間。

初

『ー♪（適当に鼻歌で）』

春彦

「（初の鼻歌の途中で）……ポカポカと暖かい。間違えて極楽にでも来てしまったのだろうか」

初

『春彦さん』

春彦

「初!?! お初!! ……なんだ? 声が、口が動かない。つ、身体も……!!」

初

『よかった。気が付かれたのですね』

春彦

『……おどろいた。この世でいちばんうつくしいものは、きみかもしれない』

初

『あら、まあ』

春彦

「この間抜けな声、稚拙な言葉回し。自由の無い身体で過去の愚行を見ているばかりとは何たる拷問。ああ、嫌でも思い出すね。これは見合いの時だ。次は、花見、誕生日、記念日……なるほど、初と出会ってからの日々を逆行しているのか!!」

――愛しい人との記憶を辿り、愚行は繰り返す。

彼女との尊き日々は褪^あせず、されど再び失う。

初

『それでは春彦さん、少々行ってまいります』

春彦

『ああ、先に楽しんでおいで。僕も今夜にはそちらに向かうから』

春彦

「ダメだ!! 手を離すな間抜け!! お前が手を離せば行ってしまふ。彼女がああ船に

乗ったら最後。もう戻っては来ないのだから!! 嫌だ初、行かないでくれ!! 行つてはいけない!! 君は今夜僕と一緒に行こう、お初!!! あ、ああ……いかないで」
足掻くこともできなければ、過去も変わりやしない。

初

「♪ (鼻歌再び)」

春彦

「うん……はっ」

初

「気が付きましたか、お久しゆうございます春彦さん」

春彦

「……ああ、やっぱり君はどんなものより美しく笑うね」

「君は黄泉にいても変わらない」

初

「貴方は少し老け込みましたね。酷い隈、忙しなくともしつかり寝るとあれほど。こんなに痩せてしまつて。ちゃんと食べていかなかったから……。死に急ぎすぎですよ、全く」

春彦

「この皺しわが笑い皺だったら良かったんだけれどね。どうにも僕はきみが居なくちゃ駄目らしいんだ。情けない僕を君は許してくれるだろうか」

……僕はこれを恋の物語などと題するつもりは無い。

ましてや、亡き妻を求めて黄泉の国へと飛び込んだ冒険譚などでも無い。

初

「……!! ふふ。今日の旦那様ごんにちは随分ずいぶんと素直に言葉を下さるのですね。過去を巡って身に染みでもしましたか」

春彦

「……僕が過去の自分を恥じていると知っていると知っているだろうに、きみもなかなか意地悪なことをするね」

初

「旦那様があんまり私を恋しく思ってくださいさってるようでしたので、思い出巡りをばと思ったのですよ」

春彦

「だからと言ってあの日のことまで見せる必要は無かっただろう……僕はあんな思いをするのは二度と御免ごめんだと思っていたというのに」

初

「それは…そうですね、すみません。私には途中で止める術すべを持たなかったのです」

春彦

これは、死者に手を引かれ淵に沈む一人の愚かな男の話だ。侘しさに潰れ、惰性で生を手放し逃げ出した、愚か者の滑稽な笑話。

「……。そうだね、君に会いたくて仕方なかったさ」

「だから君は僕に柘榴ざくろを食べさせてくれるのだろうか？ そのために、僕の力では辿り着くことのできない虚空の先へと呼んでくれた。違うかい」

仮にこの冥界での出来事を綴り、1冊にするとしたら。

僕は背表紙にはこう綴る。

柘榴は遠き海に沈む——と。

(手を叩くなりなるべく大きな音で、パアアンツと入れてください)

初

「ええ。ですからこれは、私から貴方にに渡せる最後の贈り物です」

N

『柘榴は遠き海に沈む』

大正86年、秋公開予定。特典付き前売り券は8月10日より発売開始。

S ノセとミケ『名前』

三池

「……受け取ってしまった。『じゅんくん』に渡してつて言うなり光の速さで行っちゃった。んー、リボン緑だったから同じ一年生だと思うんだけど……ダメだ自分の学年の女子なのに名前と顔が一致しない」

「そもそも『じゅんくん』イズ 誰……」

一ノ瀬

「ミーケっ」

三池

「わ、ノセ」

一ノ瀬

「呼び出し済んだみたいだから来ちゃった。終わった？」

三池

「うん、終わった終わった。待たせてごめんね、ん？ いや、そんな待たせてないよね。まだ3分も経ってないけど、どしたの。なんかあった？」

一ノ瀬

『いんや。(咳払い) ……はやく三池くんにい会いたくてえ(裏声で)』

三池

「寂しんぼか。はいはい待たせて悪かったね、ハニー」

一ノ瀬

「ダーリンざっっ雑う(ここまで裏声)。もお、ノセくん泣いちやう」

三池

「可愛くないチェンジで」

一ノ瀬

「おっと残念振られちった。……んで、何の呼び出しだった？ あれC組の子でしょ、告

白でもされた？」

三池

「まさか。ノセは記憶力いいねえ。私パツと思い出せなかったよ」

一ノ瀬

「まあね。可愛い子の名前は覚えてるよ。胸が大きいよね彼女」

三池

「なるほど最低だ」

一ノ瀬

「まあ冗談だけど、思い出せもしなかったミケよりかマシだね」

三池

「うっ、ごもつとも」

一ノ瀬

「ミケそんで結局なに言われたの」

三池

「ああそうそう。『じゅんくん』に渡してくれて手紙を預かったんだよ。私に頼んだってことはうちのクラスにいるんだと思うんだけどさ……基本苗字でしか呼ばないから男子の名前ほぼ知らないんだよね」

一ノ瀬

「ふーん。つまりミケからすると、知らん人から知らん人宛ての手紙を預かったと」

三池

「まあ……そうなるね。なんで私に頼んだのかな。(ハツとして)やつぱり話しかけ易いのかなあ。優しいな雰囲気というか紳士的な？オーラがあるのかなあ!! うんうん、私あの高嶺の桃花ちゃんとも親しいし?？」

一ノ瀬

「紳士的ねえ……普通にナメられてんじやねえの」

三池

「言うなよ!! 夢を見せてくれたっていいじゃんか!! 桃花ちゃんと仲良しなのはほんとだし!!」

一ノ瀬

「ま、単純にお前と『じゅんくん』が親しい奴だから、頼んだんだろ」

三池

「なるほど。私が渡しやすい相手……席近いのかな。高山の下の名前なんだっけ」

一ノ瀬

「つばさ」

三池

「隣じゃないなら前後か……四海は……よつみああ大輝でしょ、後ろは心くん……だめじゃん」

一ノ瀬

「ざあんねん……クラス名簿でも見に行く?」

三池

「ああ! そんなのあったね、今日のノセ冴えてる」

一ノ瀬

「ばっか、俺はいつだって冴えてるだろうが」

三池

「あはは、そうでした。失敬失敬。さて、じゅん、じゅん……おつラツキーすぐあるじゃん。いちのせ、じゅん……」

一ノ瀬

「はい。なあに、葵」

三池

「お前かよジユンくん!!」

一ノ瀬

「そーだよ、ミケってば全然俺の名前覚えてなかったんだね」

三池

「いやごめんで、すっかり失念してた……そうじゃん、ノセは名前じゃないよ。ノセって呼びすぎて麻痺してたわ。はいどうぞ、お手紙ですよー」

一ノ瀬

「はいどうも。そのくせ四海や弥六やろくの名前はちゃんと覚えてんの」

三池

「ごめんで。拗ねないですよ」

一ノ瀬

「……」

三池

「ノセえ、悪かったってえ……もう覚えたよ忘れないから許してよ、ジュン」

一ノ瀬

「もう一声」(別に拗ねてないことがわかる声で)

三池

「もう一声。なるほど、精一杯ご機嫌取りさせていただきますよ。……うん？ でも謝罪にもう一声って何？ えつと……わたくしめが悪うございました。どうかお許しくださいジュン様」

一ノ瀬

「もつと可愛く」

三池

「かあいくですか。んんん……ごめんね、じゅんくん。許して欲しいなあ」

一ノ瀬

「もつと猫っぽく」

三池

「猫お？あはは仰せのままに。ごめんにやさしい、ご主人様あ。許してにゃん」

一ノ瀬

「にゃんでもしてくれませんか」

三池

「にゃんでもしましょう」

一ノ瀬

「許しましょう」

三池

「ありがとうございます」

一ノ瀬

「なあに聞いてもらおうかなあ」

三池

「お手柔らかに頼みます」

一ノ瀬

「じゃ、今度駅前のモールにできるお化け屋敷行こうなあ」

三池

「チェンジで!!」(悔い気味に)

一ノ瀬

「あはは。却下しまあす」

三池

「横暴だあ」

一ノ瀬

「楽しみにしてるねダーリン」（裏声）

三池

「ダーリンにもうちっと優しくしてよハニー……」

箱入り嬢と幼馴染 『お友達』

二条

「助かったわ、ありがとう澄直^{すなお}」

七瀬

「別に。お前の親父さんから小遣い貰ってる分働いただけだよ」

二条

「もう。相変わらず無愛想ね。名前に反して全然素直じゃないんだから。お礼くらい素直に受け取れないものかしら」

七瀬

「余計な世話だよ、お嬢様。じゃ、俺次の競技あるから行くわ」

二条

「あつ……わかったわ。またね」

七瀬

「……素直じゃねえのはお前もだろうが。何？まだ時間あるからいいよ。いま2レース目だから、あと15分くらいか？」

二条

「あのね、澄直。さつきね一ノ瀬くんに、葵ちゃん取られたの。私が先に声掛けたのに、葵ちゃんもいいよつて言ってくれてたのに」

七瀬

「ああ、見てたよ。横から綺麗にカッ攫われてたな。一ノ瀬も大人気ねえよな、お前が折角なけなしの勇氣を出して三池に声掛けたのに」

二条

「葵ちゃんともつと仲良くなれるきつかけになると思ってたのに……他に連れて行きたい『好きな人』なんていなかったのに」

七瀬

「お前友達少ねえもんな」

二条

「言わないでよ、気にしてるんだから。一ノ瀬くん怖い顔してた、そんなに睨まなくても良かったじゃない。意地悪だわ」

七瀬

「あー、あれはたぶん無意識というか、条件反射だろうなあ。あの後わざわざ横抱きにしたのだから牽制だぜ。だれも狙わねえつての、おつかねえ。あいつ本当に三池に対し

て過敏なセコムな上独占欲クソ強いから……。三池が可哀想。あんなに一生恋人できねえよ」

二条

「本当に。あの子とつつつても鈍感だから平気なんだと思うわ。もう。もつと仲良くはなりたいたいけれど、別に一ノ瀬くんから取ってやりたいなんて思っていないのに」

七瀬

「そうだなあ。箱入りお嬢様のお前にしては、よくやったよ」

二条

「葵ちゃんに振られたら、今度はなんか自己推薦の嵐だし、怖いし。可愛いつて罪だわ。ほんとに澄直が同じチームで良かったわ」

七瀬

「別に敵チームだろうが、助けに入るよ。でも、ちよつとずつ自分で捌けるようになれよ。桃花は綺麗な顔してるから、この先もこういうことあるだろうし。俺が助けてやれるのも高校卒業するまでだし」

二条

「わかってるわよ。いつまでも澄直に甘えていられないのだから。でも怖いんだもの。なんでたいして親しくもないのに、あんなに迫つて来るのかしら……。勢いも怖いし、

捌くなんて到底無理よ……できるよになれるかしら」

七瀬

「大丈夫だろ、お前は昔から器用で物覚え良かったし。そのうち慣れるよ。慣れるまでは助けてやるし」

二条

「うん。澄直、高校生のうちは私のこと守って頂戴ね。卒業するまでにはちゃんと立ち回るから」

七瀬

「……ああは言ったけど従兄弟だし、卒業したって別に縁が切れる訳じゃないし何かあったら呼んでいいんだから。俺らはそれくらいの仲だろ。そんな暗い顔すんなって」

二条

「いいの?」(勢いよく)

七瀬

「いいに決まってるだろうが」

二条

「……嬉しい。まるでお友達みたいだわ」

七瀬

「……おい。今聞き捨てならねえ言葉が聞こえた気がするんだが」

二条

「ええ？」

七瀬

「お前にとって俺は何だ」

二条

「え、何よ急に。従兄弟でしょう」

七瀬

「いやそりやそうだけど。なに？　つまり桃花にとって俺はただの従兄弟だったと」

二条

「ち、違うの？」

七瀬

「じゃあなんで、ただの従兄弟でしかない俺がお前のために、多数の敵を作るような真似をしてると思うんだよ」

二条

「それは、お父様に報酬をもらっているから……」

七瀬

「……。あーそうかよ。ほんつとにこの、箱入りお嬢様は!!お前の父さんが女学院じゃなくて、俺に世話を頼んでまでなんで一般高校入れたのかよおく分かったわ。いか桃花、いっぺんしか言わないから一回で頭に叩き込めよ」

二条

「う、うん」

七瀬

「俺とお前は従兄弟だけど、昔からのダチみてえなもんだろうが。俺はお前のこと可愛がってるし、大事に思ってるの。お前が相手じゃなきや小遣い貰おうが、あんなに甲斐甲斐しく世話なんてやかねえし、わざわざ男共の殺意を集める真似なんざ死んでも御免だね!」

二条

「ぐすつ」(泣き出して)

七瀬

「桃花?」

二条

「そっか、そっかあ」

七瀬

「あ、悪い……大きい声出したりして、怖かったか」

二条

「ううん、嬉しいの。良かったあ……澄直いっつも不機嫌そうな顔してるし」

七瀬

「俺は元々この顔だよ、悪かったな」

二条

「いっつもつまらなそうだし、面倒臭そうにするし」

七瀬

「面倒臭いことには変わんねえよ、ああもう泣くなつて」

二条

「最低限しかお話してくれないし、すぐどっか行っちゃうし」

七瀬

「俺とばかり居たら友達できねえだろ」

二条

「……居ないけどできてないもん」

七瀬

「それは……今後に期待だな」

二条

「ねえ、澄直」

七瀬

「なに」

二条

「廊下で会ったらお喋りしてくれる？」

七瀬

「いいよ」

二条

「お昼ご飯一緒に食べに行ってもいい？」

七瀬

「好きにしてくれ」

二条

「放課後一緒に寄り道するのは？」

七瀬

「たまにな。あー、まあ、なんだ。今まで素っ気なくしてて悪かったよ」

二条

「ううん。今嬉しいからもう気にしてない。ねえ、今日帰りにどこか寄り道したいわ」

七瀬

「優勝したら打ち上げあんだろ」

二条

「それだつて放課後の寄り道よ」

七瀬

「寄り道の判定ガバガバすぎんだろ……お前がいいならいいよ」

二条

「負けたらどこに行く？ 澄直は男の子だからお肉がいいかしら。ステーキ？」

七瀬

「すげえ偏見。まあ、肉つてのは悪くねえわな」

二条

「本当？ ふふ。……約束よ、澄直」

七瀬

「へーへー。つたく、いつもそんなくらい阿呆っぽく笑ってりやいいのに。そしたら友達とかもできんじゃねえの」

二条

「そ、そうかしら。えっと、こ、ことう？」

七瀬

「ふはっ。下手くそ」

二条

「もう。あつ騎馬戦のアナウンス」

七瀬

「じゃ、行ってくる」

二条

「行つてらっしやい!! 声援いっぱい送るからね!! 任せて!!」

七瀬

「いや、それはやめてくれ……」

二条

「なんでよ!! お友達が頑張るのだから、応援したいに決まってるじゃない」

七瀬

「無駄に野郎の恨み買ったかねえよ」

二条

「むう。……本当に可愛いって罪だわ。わかった、大人しく控えめに応援してる」

七瀬

「……声援、1回だけな」

二条

「!! わ、わかったわ!! 任せて澄直」

——間。

二条

「すなおおーっ! がんばれえええ」

七瀬

「あんの馬鹿……何が『わかったわ』だよ。ぜんっぜんっわかってねえじゃねえか。……すっかり忘れてんな、つたく」

二条

「ああっ、危ない澄直!! 後ろから来てる!! あつやだ負けないで!!!」

七瀬

「へーへー。負けませんよつと。ほんと。あいつ黙ってくんねえかなあ……」

「よつと。あつぶね、あ？ 別に二条に好かれてるからって調子に乗ってるつもりはねえよ。ただ可愛いお友達が期待してんのになにに負けんのはちよつとカツコ悪いだろうが。てことで負けてくれや」

二条

「すごいっ!! 澄直勝ったあ!!……あれ、なんか澄直の眉間の皺がすごいことに……怒ってる？ はっ、やだ。いっぱい声援送っちゃったからだ……。あつっ、ちよつと来いやつて顔が言ってる。で、デコピンの刑かしら……うう、される前から額が痛い」

—間。

二条

「うあ……えつと、騎馬戦。見事な勝利だったわ。おめでと」

七瀬

「そりやどーも。桃花、俺はお前になんつつた？」

二条

「声援は、1度までと言われました」

七瀬

「だよな？」

二条

「はい……言い訳しないから、ひっ、一思いにやってちょうだい」

七瀬

「いいだろう。潔くて結構」

二条

「あ、あまり痛くしないで頂戴ね……」

七瀬

「っ、たく」

二条

「ツたあい……ごめんなさい」

七瀬

「はあ……応援、ありがとな」

二条

「うん!!」

花、2輪。　　く葵と桃く　『お誘い』

二条

「……（深呼吸）」

「大丈夫よ、私。あんなに練習したものだ。笑うな膝、震えるな声。さ、ドアを開けるのよ私。今日こそ葵ちゃんをお誘いするのだから」

「……なんでクラス離れちゃったのかなあ。2年生になったら澄直すなおと一緒に喜んだのに、今度は葵ちゃんと離れちゃうんだもの」

「……葵ちゃん、新しいクラスでもきつと人気にだわ。もうずっとお話できてないし、私なんてきつともうお友達の間隔……。ああ、もう。弱気になつてはダメよ、しゃんとなさい私。澄直にも応援してもらったのだから。今日こそ、親睦を深めるのでしょう。気合いを入れるの……（息を吐いて精神統一）」

「よし……失礼しま」

三池

「桃ちゃん（早めに被せて）」

二条

「きやあ。あ、葵ちゃん」

三池

「ずっとクラスの前でいたから気になって来ちゃった。どしたのー？ 誰かに用事？ 呼んで来よか」

二条

「葵ちゃん」

三池

「んー？」

二条

「葵ちゃんにお話があつて、来たの」

三池

「まーじで！ 私だったかあ、やった。それならもつと早く声掛けたら良かったよ」

「桃ちゃん2年生なつてから、生徒会でずっと忙しくしてたでしょ。全然話せなくて寂しかったから嬉し」

二条

「そ、そつかあ」（安心したように笑つて）

「私もね、クラスが離れちゃつて寂しかったの。それでね、えつと……」

三池

「ん？」

二条

「あのね、葵ちゃん」

三池

「うん。なあに、桃花ちゃん」

二条

「今週のどこでもいいのだけどね、放課後空いている日はあるかしら」

三池

「あるよ」

二条

「本当っ！」

「あの、あのね、一緒に帰りたくて。葵ちゃんともっと仲良くなりたいの」

三池

「もしかしてえ……デートのお誘いだね？」

二条

「うん。おデート。ふふ。おデートしましょ、葵ちゃん」

三池

「よろこんでー！ いいよ、私も桃ちゃんと仲良くなりたいもん」

二条

「嬉しい……！ ありがとう葵ちゃん」

三池

「うんうん行こ行こ。どこ行こうかな。桃ちゃんさ、パンケーキとか好き？」

二条

「すきよ。バナラアイスが乗っているのがすき」

三池

「そっかそっか。1 駅先なんだけど近くに新しいカフェが出来てね。ハチミツを売りにしてるんだけど……まってね、今サイト検索してるから。あ、あったあった」

二条

「わあ、かわいい。くまさんのパンケーキ、美味しそうね」

三池

「でしょー。桃ちゃんこういうの好き？」

二条

「うん。すきよ」

三池

「ん。よーし。じゃあここでお茶しよ」

「話してたら食べたくなってきた……ね、デートは今日でもいいの?」

二条

「えつ、うん。えと急だけど、いいの? 一ノ瀬くんは?」

三池

「あー……ノセえー! (振り返って教室に向かって叫んでる)」

「あれ。居ない。四海よつみー! ノセはー? まだ掃除?」

「え、呼び出し? 七瀬? あー。隣のクラスのイケメン君。んー。メッセ飛ばしておけばいいか」

二条

「……大丈夫なの?」

三池

「ん、大丈夫。さ、桃ちゃん行くよーっ!」

二条

「わっ」

三池

「そうだった。桃ちゃん、たこ焼きとか食べたことなさそう」

二条

「えっあつ、葵ちやつ、早い……」（息が上がり始める）

三池

「うんうん、たこ焼きも食べに行こうね」

二条

「ま、まつて葵ちゃん、早い……足がもつれそう……」

三池

「あつ、ごめん。急に引つ張つて。桃ちゃんにお誘いされたのが嬉しくて、つい」

二条

「（息を整えて）……ふふ。私も嬉しい。葵ちゃんに手を引いてもらったおかげね、気分だけじゃなくてほんとに足が軽かったわ」

三池

「へへへ。そつかあ。私桃ちゃんのそういう言葉選び好き」

二条

「ええ？ 何か変わった言い回しをしたかな……」

三池

「んー。なんだろう。なんとなく、お姫様って感じがする」

二条

「お姫様？」

三池

「うん。可愛いくて好き」

二条

「わ、私も葵ちゃんの明るくてお日様みたいな声が可愛くて好きよ。葵ちゃん見るとね、元気が出るの」

三池

「そっかあ、可愛いなあ。……ありがとう」

――間。

三池

「たこ焼き美味しかったねえ」

二条

「うん、美味しかった」

三池

「ね、誰にさっきの写真送ったの？」

二条

「よくお話してくれるお友達」

三池

「あつ、もしかして七瀬って人？ 仲良いつてずっと噂になってる」

二条

「そう、七瀬澄直。んふ、噂になってるなんて、なんだか擦くすくったいわ。ふふふ、そうなの、私と澄直は仲良しなの。周りにもそう見えるのね、なんだかちよつと嬉しい」

三池

「ふうん。じゃあさ、やつぱり桃ちゃんはその七瀬が好きなんだ？」

二条

「やだ。葵ちゃんが思ってるようなのじゃないわ。従兄弟だもの。でも、もちろん大好きだよ」

三池

「なあんだ従兄弟かあ。実は付き合っているんじゃないかって噂もあつたのに、ガセだったかあ」

二条

「ガセでしたあ。それに澄直はね、私みたいな子供っぽいより、お姉さんが好みなのよ」

三池

「桃ちゃんは子供っぽいかあ？ 落ち着いてて淑やかなお姉さんだと思うけど」

二条

「よして、葵ちゃん。少なくとも澄直にとつては手のかかる子供みたいなものなのよ。んふふ、ね、葵ちゃんにだけ特別に教えてあげるね」

三池

「おつ、なになに。あの青春クソ野郎大賞を受賞した七瀬の恥ずかしい秘密でも？」

二条

「もう、なあにそれ。そんなに大した秘密じゃないわ」

三池

「あれ、桃ちゃん知らない？」

二条

「うん」

三池

「体育祭の借り物競争のお題が毎回ある意味酷いでしょー。『好きな人』だとか『告白した人』とか、『可愛い先輩』だとか。別名『青春クソ野郎晒しあげレース』とも言うんだけど……」

二条

「ああ。そんな話を聞いた気がする。お題には私も困ったもの」

三池

「んでね、みんなの二条桃花ちゃんに『好きな人』で指名された七瀬が、満場一致で去年の『青春クソ野郎オブザイヤー』を受賞したってわけ」

二条

「……そんなものがあつたのね。知らなかった。ほんとに澄直には面倒かけてばかり……」

三池

「何言ってるのさ、役得だよ、役得。あーあ、本当は私が桃ちゃんと仲良くゴールしてたはずなのになあ」

二条

「私だって、葵ちゃんと一緒に走るつもりだったもん。なのに一ノ瀬くんが、葵ちゃん取ってっちゃうものから……」（膨れたように）

三池

「ああ……思い出したらノセにも七瀬にも腹が立つてきた。よし桃ちゃん。七瀬の秘密
どーんと言っちゃおう」

二条

「ええ……別に澄直は悪くないじゃない。意地悪したのは一ノ瀬くんだもん。それに、
その話を聞いた後だと少し気が引けてしまうわ」

三池

「私からしたら七瀬も羨ましいから絶許ぜっきょ」

二条

「そっかあ」

三池

「大した秘密じゃあないんですよ。いいよいよ、私の心の七瀬もいいよって言ってる。
まあ私、七瀬のこと全然知らんけども！」

二条

「んふ。葵ちゃんたら。あのね、澄直の初恋はね、幼稚園の先生なの。ほなみ先生って
言ってるね、とつても綺麗な先生だったのだけれど。澄直、卒園して小学生になってもし
ばらくはほなみ先生のが好きでね、たまにお花とかお手紙とか渡しに行ってたの

よ。可愛いでしょう?」

三池

「うわあ、ませてんなあ。でもまあ、確にかわいいかも」

二条

「私の家庭教師の先生を好きだったこともあるから、間違いなく澄直はお姉さん好きよ」

三池

「なるほどね。じゃあ数学のさ、浅野先生とか好きそう」

二条

「そうかも……ふふふ。残念、既婚者」

三池

「わあ、失恋確定じゃんか。可哀想に七瀬。今度慰めてやろ」

二条

「全然話したことないのに?」

三池

「ないのに」

「あ、じゃあさ、桃ちゃんから伝えおいて。ドンマイ。次のいいお姉さんに会えるとい
いね。って」

二条

「嫌あよ。もうっ、んふふ」

三池

「ふふ。……さて、そろそろお店出よつか。次はお待ちかねパンケーキだよ」

二条

「うん。楽しみ。……んー、たこ焼きもう少し食べたかったな。もつと、大きなパックで買えばよかったかしら」

三池

「ダメだよ桃ちゃん、パンケーキの容量を甘くみちやあ。かわいい見た目と裏腹にとんでもなくお腹に貯まるんだから。桃ちゃん少食そうだし、絶対キツイって」

二条

「そうなの。じゃあ帰り道でお土産にでも買おうかな」

三池

「あはは。そんなに食べたいかあ。でもきつと帰る頃にはお腹いっぱい、そんな気はしないと思うよ」

二条

「そうかなあ」

三池

「絶対そう。だけど意外だなあ。桃ちゃんたこ焼き食べたことあったんだ」

二条

「うん。縁日に連れて行ってもらったことがあって」

三池

「ふうん。じゃあさ、ハンバーガーって食べたことある？」

二条

「んー、食べたことはないわ。小さい頃に母に強請つてみたことはあるのだけど……
ジャンクフードは身体に悪いからと、食べさせて貰えなかったの」

三池

「あー、やっぱり」

二条

「でも、知ってるよ。丸いパンの間に薄いハンバーグとレタスやトマト、チーズが入っているのしょう？ ベーコンも入っていれば最高ね！ 9月にだけ発売される卵が入ってるのが美味しそうだった……」

三池

「……本当に食べたことないの？」

二条

「あ、えつと、その。テレビでよくコマーシャルが流れるから」

三池

「あーなるほど。ねえ、桃ちゃん。ちよつと体に悪くて、とびきり美味しいの、食べてみたい?」

二条

「身体に悪いものは美味しいと相場が決まってるもの」

三池

「よし、じゃあパンケーキはまた今度にしよう」

二条

「え?」

三池

「今日は『二条桃花ジャンクフード記念日』としよう。ね、桃ちゃん」

二条

「ええ……いいのかな」

三池

「いいよ。たまには、ちよつと悪いことするのも大事」

「ね、行く」

二条

「んー……ふふ。うん、久しぶりにちよつと悪いこと、しちやおうかな。母さまには内緒」

三池

「うんうん、そうしよ。消臭も任せて。リュックの中にフアブあるから。証拠隠滅もばっちり」

二条

「それは……用意周到ね？」

三池

「でしょー。って言いたいけど、実はね。この前ノセと焼肉食べに行ったんだよ。それで装備してたんだけど、そのまま片すの忘れてたんだあ」

二条

「焼肉！ いいね。そして相変わらず一ノ瀬くんとは仲良しさんなのね、いいなあ」

三池

「んー。どうだろ。なんかさ、やつぱりノセが何考えてるかわかんないんだよね」

二条

「……………？また、何かされたの？」

三池

「んー。急にハニトラしてくることは減ったんだけどさ」

二条

「ハニトラ……。一ノ瀬くんのアプローチはそんなんじゃないと思うよ……………」

三池

「なあんか、今度は素っ気なくてさ。ずっとベツタリだったのに、なんというかこうね、急にパーソナルスペースが広がったもんだから、今猛烈に違和感がある」

「ノセの のしかかり が無くなると、こんなに地球の重力は軽かったのかって感じた」

二条

「……………ああ、押してダメならなんとやら」（小声で）

三池

「まあ、ノセは猫ちゃんみたいだからねえ。またいつもの気分屋だと思っただけどね、こつちとしてはちよつと寂しいじゃんか」

「でもまあ、気分屋で引っ付いたり離れたりするのがノセなんだし、そんなノセの気分に合わせてるのもマブである私の役目だし。また私に構いたくなるまでのんびり待ってる

よ」

二条

「まぶっ？」

三池

「俗語なんだけどね、マブダチ。親友ってことだよ」

二条

「……そつかあ」（一ノ瀬くんが可哀想と思ってる）

三池

「だからね、桃ちゃん」

二条

「？ なあに」

三池

「その間に、いっぱい放課後遊ぼうねー」

二条

「……！うん。嬉しい」

三池

「パンケーキ行つて、駅前の大きな綿あめ屋さん。あつ、桃ちゃん紅茶が好きだったよね」

二条

「うん、すきよ」

三池

「3 駅先だからちよつと遠いんだけどさ。来月にね、新しくカフェがオープンするんだ。そこがね、世界中の色んな茶葉が揃ってて、更には紅茶を使ったスイーツも出すっていう広告をネットで見つけてさ」

二条

「わあ、それは素敵なお店だね。とっても気になるわ」

三池

「でしょー。桃ちゃんと絶対行きたいって思ってたんだ。2 人で行こうね」

二条

「うん。約束よ」

三池

「約束ー！ でもまずは先にパンケーキの約束をしよ。ね、桃ちゃん今週はあといつが空いてるの？」

二条

「んふふ。あのね、本当は今日一緒に寄り道が出来るとは思ってたから、今週は葵

「ちゃんかどの日を指定しても応えられるように全部空いてるの」

三池

「んえええ。桃ちゃん健気かよ……かわいい、ほんとにかわいい」

二条

「もう、からか擲揄うのはよして頂戴。それくらい葵ちゃんとお出かけたかったのよ」

三池

「うんうん、嬉しいよ。じゃあ明日は私部活あるから、明後日にしようか」

二条

「明後日。水曜日……ふへへ、今もお出かけしてる最中なのに、もう明後日が楽しみ」

三池

「ねーっ、私も……あつ、ここだよ。さあて、何頼もうか」

二条

「わ。メニューがいつぱい……どれにしよう……ねえ葵ちゃん」

三池

「んー?」

二条

「葵ちゃんにお任せしても? ……目移りしちゃって、日が暮れちゃう」

三池

「あはは。おつけ。任せてー。ベーコン入りの選んだげる。飲み物は何がいいかな」

二条

「んー……アイステイーはあるかしら」

三池

「あるよ。じゃあ2階で席取って待ってて」

二条

「はあい。ありがとう葵ちゃん」

間。

二条

「……いっぱい遊ぼうね、だって。ふふ、嬉しい。仲良しさんみたい」

「一ノ瀬くんには悪いけれど、これからたくさん放課後に遊べるのね……きつと今よりずっと親しくなれる、楽しみ」

「うん、そう思ったら一ノ瀬くんなんて怖くないわ！ 頑張るのよ、私」

ちいちゃい妹を看病するお兄ちゃん、
または看病される
妹ちゃん

妹

「けほっこほつ。……さみしい。お熱やだなあ。にいに、お兄ちゃんまだかなあ」

兄

「ただいまつ、兄ちゃんが帰ったぞ」

（靴を脱ぐのも適当で、とにかく合わせてバタバタと妹のいる部屋に入ってくる）

妹

「にいに……?」

兄

「ああ、良かった。悪化とかはしてなさそうだな」

（息切れしながら）

妹

「んふふ、いそいで帰って来てくれたのねー。息が切れてる。おかえりなさい」

兄

「えー？ そりや、急いだよ。当たり前だろ、ちっちゃな妹が熱出して、家で待つてるんだから。くそ、なんでよりによって今日が学期末テストだったかな」

妹

「んふふ。テストは仕方ないねえ。大事、大事。そんな日に私もお風邪こんこんしちゃうとは、不覚です」

兄

「1人にして悪かったな、寂しくなかったか？」

妹

「うん、寂しくなかったよ。平気。私ももう立派なお姉さんなので……！お留守番ぐらい平気なのです」

兄

「そうかあ、寂しくなかったか。お前は偉いなあ。兄ちゃんは今でも、熱出したりとちよつと心細くなつちやうよ」

妹

「うう……うそです。さみしかったですあ。お兄ちゃんおそいんだもん」

兄

「嘘だったかあ、可愛いなあ。そうだよな、寂しかったなあ、ほんとにごめん1人にする

しかなくて。よしよし、泣かないで。遅くなつてごめんな、もういっぱい甘えていいんだよ」

妹

「ぐすつ。ちがう。お兄ちゃん悪くないもん、しかたないもん。それより、わたしはがんばったので、ほめてほしいのです。いっぱい甘やかしてくれるなら、ごめんねじゃなくて、いい子いい子つてして……!」

兄

「そうだよな、がんばったら褒めてほしいもんなあ。兄ちゃんは気が利かなくていけないなあ。うんと褒めてやらなくちやな。よしよし、お前は頑張り屋さんでえらいよ。寂しいの我慢してくれてありがとう、いい子いい子。早く元気になれよ」

妹

「ふへへへ。撫でられるの好き。んふふ。わたしはいい子です」

兄

「撫でられるの好き? そうだなあ、ほんとにいい子だよ、お前は……いくらでも撫でてやるよ……ああ可愛いなあ、よしよし。そうだ、帰りにゼリーとかプリンとか買って来たんだけど、食べたいのあるか? アイスメもあるよ」

妹

「なんとつ。いい子で待ってた私にご褒美ですか。プリンに、ゼリーに、アイス!! なんと豪華なつけほっこほっこほんっ」

兄

「あーあー。興奮しないの。咳き込んだ時は背中さすればいいんだっか……こうかな。大丈夫か、よしよし。ほら、お水飲んで」

妹

「コホコホっ……おみず……? うん飲む……ふう。つい豪華なおやつのラインナップに興奮しました……」

兄

「落ち着いたか? 良かった。いや、待っててくれたご褒美というか、食欲無さそうだったからさ、何か少しでも食べて欲しくて」

妹

「なるほど、確かにあんまりご飯はたべたくないけれど、プリンは食べれるかもです、お兄ちゃんてんさいです。うん、プリンたべたい」

兄

「そうかあ、良かったプリンは食べれそうなんだな。待っててスプーン持ってくるよ。……よし、ほら食べれるだけでいいからな」

妹

「……？ 食べさせてくれないのですか」

兄

「なんだ、食べさせてほしいの？」

妹

「……甘えていいってお兄ちゃんゆった」

兄

「そうだな。もちろん、いいよ。いつも頑張ってるから、今日は兄ちゃんがいっぱい甘やかしてやろうな。……食べたくなくなったら言うんだぞ。はい、あー」

妹

「あー……ふふふ美味し。お兄ちゃんがあーんってしてくれるならいくらでも食べれる」

兄

「んふ。ほんとに、これならいくらでも食べれるの？ じゃあ夕飯も食べさせてあげような」

妹

「ひゃあ。うそです。いくらでも食べれるのはプリンだけです。夕飯は自分でたべま

す

兄

「えー、夕飯はダメなの？」

妹

「んう、ダメえ。さすがに恥ずかしいゆえに……」

兄

「そっかあ、恥ずかしいかあ。……可愛い。じゃあちゃんと食べて、寝て元気になろうなあ。じゃないと兄ちゃんは心配でまた、手ずから食べさせたくなるからなあ」

妹

「なんと。じゃあ、はやく治さなくちゃですね、小学生にもなって、ご飯をあーんしてもらうのは人権が無くなります。あれです、社会的な死というやつです。己の人権を守るために、頑張って治します。おやすみなさい」

兄

「……そこまで嫌がられると兄ちゃんは悲しいんだけどなあ。早く治るといいな、おやすみなさい」

柘榴は遠き海に沈む。〔試作〕

春彦

「晩秋ばんしゅうの砂浜。素足を撫でる波は、僕をゆるやかに誘っていた。きつと凍えるほど冷たいのだろう。それが分からないくらいに僕はその先へと行きたかった」

「僕の目はもうずいぶん前から温度を映さない。ぼうつと周りがぼやけるように暗かった。それからだんだんと色が分からなくなったのだ。代わりに眼まなこが見つめるようになった虚空は、とても遠くて。それはどこまで歩いても届かないくらい、遙か彼方にあるのだ」

「海はそんな僕のすべて理解しているかのようにとても静かだった。昔、君と来た時。足首にまわりついて遊んでいた無邪気な波は、居なかつた。柔く、穏やかに、ただ優しく、冷たい淵ふちへと招いている」

「ああ。この先だ。この虚空の先に君がいる」

「ようやつと見つけた。何をしても辿り着けなかつた先へ行く道は、海にあつたのだ」
「けれども君の元にゆくには、僕は熱すぎる。こちらで生きるには、ささやかすぎる熱量でも、あちらへゆくには、きつと少しばかり熱を持ちすぎている」

「ならば暫く眠るとしよう。なに、苦しくはないさ。逸る鼓動はやが海水と同じくらいに冷える頃には、海が君の元へと連れて行ってくれているだろう」

「それまでに僕がするべき事と言えば、いかに誠意を見せるかに重点をおいた謝罪方法と、謝罪の後に伝えそびれた愛を伝えるタイミングを練ることである」

「ああ、ようやくと呼んでくれたね。長かった、実に永かった。ようやく君は僕に柘榴ざくろをくれるのだろう」

「君に会えたら伝えることがたくさんあるんだ」

――間。

春彦

「ぼかぼかと暖かい……間違つて極楽へと来てしまっただろうか」

初

『♪ (適当に鼻歌を)』

春彦

「……っ!!」

初

『春彦さん、お気付きになりましたか』

春彦

「お初！ お初！！ 会いたかったんだ、君が居なくなっちゃってしまってから……」

「僕は持ち得る浪漫の全てを駆使して、再会の喜びを伝えるつもりだった。なのに、僕の頭はぼうつとして、思わぬ方へと口が勝手に回り出した」

『この世でいちばんうつくしいものは君かもしれない……』

初

『あら、まあ。』

春彦

「—— 思い出した。これは見合いの時、はじめて君に出会えた日の記憶。ろくに目も合わせる前に緊張で気絶するような情けない男を介抱してくれた、優しいひと。目覚めてはじめてちゃんとその姿を見た時に、あんまりにうつくしく見えたものだから。つい、そのようなことを口にしてしまったのだ」

—— 問。

初

『春彦さん、どちらへゆくのか』

春彦

『それは着くまでの楽しみだ。でもきつと君は花のように笑うだろうね』

「そうでは無いだろうが！まずは日傘を差しだせ、自分!! 浮かれる前に、彼女の乳白色にゆうはくいろの繊細な肌を気遣え馬鹿者!!」

初

『まあ。それは、いつそう楽しみになりました』

春彦

『そうかい。それは良かった』

「……はあ、困った。実に困った。これは花見の記憶だな。お初と夫婦めおとになって初めて出かけたのだから忘れる訳が無い。ああ、君と再び会えたというに、思うように身体も口も動かないと来た。過去の愚行を繰り返す己を見るしかないとは、何たる拷問だろうか」

初

『春彦さんは、うつくしいと思ったものを私にも見せてくださるでしょう。初はそれが嬉しいのです』

春彦

『……』

初

『あら。私の旦那様は照れると眉間に皺が寄りますね』

春彦

『……』

初

『愛らしくて良いと思いますよ』

春彦

『お初さん……』

？

初

『はい、なんででしょう』

春彦

『あまりからかわないでくれよ……』

初

『あら嫌だわ、旦那様をからかってなどいなくてよ。本心だわ』

春彦

『ああそうかい、じゃあ僕はもつと男を磨かないといけないね』（拗ねたように）

「……ああ、拷問だ。詩が少し売れただけの小僧の虚勢など脆いことこの上なし」

問。

春彦

「……次は夜か。ふむ、あそこの団子屋が潰れている。少なくともあれから2年が経っているな。……この道、つ!! ゆくな!! 生まれ!! ああ馬鹿者!! 看板など見るな!!」

「……桜屋。居酒屋の店か」

「入るな! 一晩飯を抜いたくらいで死なないだろう!! 帰るんだ! 帰れ!!」

すみ

『いらつしやいませ』

春彦

『ここは晩御飯を食べることができるだろうか』

「……すみ、当初はこんなに幼かったか」

すみ

『晩御飯ですか。お酒の肴さかなならば、少々ございます』

春彦

『それは良かった』

――間。

春彦

『うん、美味しいな。外で食べるのは久しいけれど、たまにはいいものだ』

すみ

『ありがとうございます、母が喜びます。ところで春彦さん、お酒は飲まれないのですか？』

？』

春彦

『酒かあ……』

すみ

『お嫌いでしたか？』

春彦

『いいや。飲んだことはないんだ。父親が悪い飲み方をするような奴だったものだから』

ら』

すみ

『では。今夜、春彦さんの酒開きでいかがでしょう』

春彦

「馬鹿、よせ。お前はとんでもない下戸なのだ」

『……これが酒。どれ一口』

「飲むな、やめろ!! はーはーこの大ボケ野郎、人の忠告は聞け!!! やめろって言うてんだ!!!」

| 間。

初

『春彦さん、春彦さん』

春彦

『ん、うう……僕のいつとう好きな声がするよ』

初

『気が付きましたね、春彦さん。帰りますよ』

春彦

『おはつ……?』

初

『はい、あなたの初ですよ』

春彦

『ああ本当だ（ふにやりと溶けるように）。すみ、すみ！ 見ておくれこの人だよ、おはつさん、僕の人だよ』

初

『およしになって、春彦さん。おすみさんもお仕事なさってるのだから、邪魔はいけな
わ』

春彦

『む。そうだね、すまない。やはり、おはつさんは気配りのできる良い人だあ』

初

『……お酒、嫌ってらしたでしょう。飲むなんてどうなさったのですか？』

春彦

『うん？ すみがね、薦めてくれたから。少し飲んでみたくなっただ。なんだか不思議な心地だね。おはつさんも飲むかい？ まだ熱爛あつかんが一本空いてないんだよ』

初

『いいえ。今夜は遠慮しておきます。お勘定はすませましたから。さ、帰りますよ』

春彦

『はあい。ん、あれ……立てない』

初

『あら、まあ。仕方の無い人ですね』

初

『はい、……まあ大将さん、お気遣いありがとうございます。ですがお構いなく。この度はうちの人がご迷惑を。これ以上お手間をかけさせる訳にはいきませんので』

『春彦さん、肩に手を回せますか？』

春彦

『わかった。たいしよう、ごちそうさまでした』

——短い間。

初

『さて、旦那様。店を出ましたし、人目はありません』

春彦

『うん？ そうだね』

初

『では、失礼して……よい、しよ。抱えた方が早く帰れますから、どうか辛抱なすつてく
ださい』

春彦

『はあい。おはつさんすごいね、僕知らなかったよ』

初

『米一俵より軽いですよ。旦那様は少食でいらつしやるから、もう少しお肉や魚を召上がった方が良いですね』

春彦

『むう。そうかあ、米屋の娘さんには僕なんて綿のようだね』

『頼むからもうその口を閉じてくれ……そして一度死ね。死んで詫びろ。それを見てから俺も死ぬ』

『ああ。お初、お初。僕は君に謝ることが思っていたよりずっと多かつたようだ……』

『……おはつさん、怒らせてしまったかい』

初

『いいえ。ただ、心配はしましたよ』

春彦

『せっかく昔馴染みとの食事だったのに、家で君を待っていられなくて、すまなかつた』

『お酒。夜を一人で過ごすのは久しかったから。少し飲みすぎてしまった』

『君は僕よりずっと凛々しい。4つも年下の男でしかも甲斐性なし、嫌になつてしまつただらうか』

初

『いいえ。ちつとも。私は貴方が私の為に背伸びをしてくれていることを知っていました』

『可愛らしい人だと思っておりますよ。ええ、それこそ、私などよりずっと可愛らしい。ねえ春彦さん。4つも年上でしかも、愛嬌もなく愛らしくもない女ですが、あなたは私のことを嫌になったことがあつて?』

春彦

『ないよ』

「そんな事、ただの1度も無い!!……くつ、動かない口が憎い!!!」

初

『ふふ。それはようございました』

『私わたくしだつて、1度もありません。あなたの綴った言葉になぞるなら、月ではなく、あの『ぼらりす』の星に誓つて言いましょ』

『私はあなたのどこか捻ていながらも、心のままに綴られるうつくしい言葉を聞いているのが好きなのです』

春彦

「お、お初うう……」

『うっお初さん、あれは良くないから塵ちこみにしたと! 捨ててくれと!!』

初

『あら、捨てられた塵を拾ってもバチは当たりませんわ。……旦那様の妬いたお餅がなんだかたまらなく愛おしく思えて、塵にするのが私には勿体無かったです』

春彦

『焦がした餅のどこが愛いんだ……』

初

『貴方は素直に伝えてはくださらないけれど、文字に綴る時は素直になりますでしょう。旦那様が隠されている心に触れられるようで、それが私には愛いのです』

春彦

『ずるい。きみはずるいひとだ』

『そんなことを言われては僕にはとても敵わないよ』

初

『ふふふ。ごめんあそばせ』

春彦

「僕には間違いなく駄作以下の汚物でも、彼女にとっては愛らしいものだった。だから、僕も。その後であの書き物を破ることも燃やすこともしなかった」

「お初が好きだと云うから、たまに見返しては自己嫌悪に陥る悪い習性も着いた。お初

げで諦そらんじることまでできるようになってしまった」

「月は美しい。誰もがあの美しい天体を見つけては息をつき、静かな夜半よわに寄り添よわせるのだろう。私も月は好きだ。

だがしかし、白蓮はくれんの君よ。貴女に誘うその男は頂けない。月をわかつていない、今宵は満月でも明日になれば欠けるのだ。

白蓮の君、聞いておくれ。

満ちて欠けて、時折見えなくなるそんな不確かな星に誓を立てるなど軟派者のすることだ。

私ならば、北の空に輝くあの不動の星に誓うだろう。月と比べれば見栄えもせず小さな輝きだが、貴女に誓を立てるには相応しい美しさだ。

どうだろうか、私はあの北極星、ぼらりすに誓う。

不自由な暮らしも、温もりも。貴女の望むものならばなんであつても、私は全身全霊をもつて応えてみせよう。

だから貴女はそのいけ好かない色男の手を振り払つてはくれないだろうか」

「……青い軟弱者の願望を綴つただけの散文だ。男を語るならば、飛び出して自分で追いかえばいいものを」

間。

初

『春彦さん、文集の編集者様からお電話ですよ』

春彦

『……留守だと言っておくれ』

初

『あらまあ。よろしいのですか、作家先生』

春彦

『いいんだ』

初

『左様でございますか。わかりました』

春彦

「次は昼だな。これは何の記憶……もとい、どんな醜態なのやら……」

初

『……ええ、申し訳ございません、笹谷さま。ただいま留守にしております……まあ！ さすが古馴染みの方、あの人のことはお見通しですね。……あら。ふふふ。はい、

はい。まあ、よいのですか？ わかりました、お心遣いありがとうございます。そんな、とんでもございませんわ。笹谷さまには、本当にいつも良くしていただいて。これからもどうかあの人のことを、きやあ。春彦さん』

春彦

『おい夏目、鼻の下を伸ばすんじゃない気色悪い。気持ちは分かるが、生憎この人は僕の人なんだ他を当たれ。あ？人妻には興味無い？ 知るか。お前の性嗜好など蚤のみほども関心などない！ただ不快だ。……ああ悪いね。留守にしていたが、今しがた帰ったんだよ。……知らん！だいたい僕は詩人だと言っているだろう。偶々たまたま気が少しばかり向いて書いた小説が流行ったからと言つて、次を迫るな。俺の文学を金としか見ていない上のもんにも伝えておけ！ いいな！……ふっ』

「……ああ、1作目の小説が流行って間もなく筆が止まった時期があつたな」

初

『春彦さん』

春彦

『……』

初

『親しき仲にも礼儀あり、と言います』

春彦

『……すまなかつた』

「俺は覚えている、これは塵ちりほども悪いと思っていない」

初

『私に伝えてどうするのです。次に笹谷さまとお話なさる時にお伝えください』

春彦

『……はい』

初

『……近頃旦那様の筆は重たい様子。1度置いてしまいませんか』

春彦

『え』

初

『気晴らしに参りましょう。しばらく置いておけば軽くなるかもしれませんよ』

春彦

『あつ！ああつ！！ 旅行だね。うん、そうしよう。汽車に乗ってどこか遠い場所へと行こう。せつかくだ、君の行きたいところにしよう。どこか行きたい所はあるかい』

初

『貴方とならばどこへ出かけても、きつと楽しゆうございます。しかし、強いて希望を述べるのであれば箱根へ行きたいです。連れて行ってくださいますか』

春彦

『ああ！ もちろんだとも』

「あの旅行は本当に楽しかった。汽車から眺めた景色も温泉も良かった。そして何より」

初

『春彦さん、見てちょうだいな』

『まあ!! 春彦さん、人力車ですって。あれに乗って宿まで帰りましょう』

『寄木細工だわ、美しい模様ね。あら? どうやって開けるのかしら……店主さま、こちら是小箱ではないのですか? ……開けてみてくださいさる? つ!! まあ! そんな仕掛けが。ねえ、春彦さん!』

春彦

「何より初が少女のようにきやらきやらと笑う。珍しくはしゃいでいた……夏目が初に提案したことだと知らなければ尚のこと素晴らしい思い出だったんだがな」

間。

春彦

「うっ、顔が暑い……次はなんだ。ここは家ではないな？ ああ、さては手前、酒を飲んだな……桜屋か」

春彦（酔って少し高めの幼い声で）

『……はあ。僕はもうダメだ……ううお初う』

春彦

「下戸が酒を飲むからだな、この間抜け。酒に弱いことをなぜ学ばない。はあ……過去の己はどうしてこうも阿呆なのだ」

すみ

『まあ、作家先生はお悩みですか。さ、お酌させていただきますし』

春彦

『んあ、すみい……ありがとう』

春彦

「ああ、馬鹿者もう飲むな、クソっどうにも歯痒い」

すみ

『どうなさったのですか、奥方と仲違いでも？』

春彦

『違うよ……僕はもう、とうにあの人に溺れているとゆうに、お初さんはいつも、しずしずと、やわく微笑んでいるばかり……いや、不満ではない、口説かれど、動じぬ凛としたところも好いている』

すみ

『相変わず、奥様に惚れ込んでらっしゃるのね』

春彦

『ああ、すきなんだ。でも、僕には魅力が足りないのかと、思ってしまった。僕だって、僕だって、あの人の頬を染めてみたい。視線を彷徨わせて、口を結んで欲しい。呼吸を忘れて、僕の言葉に喉を鳴らしてほしい』

すみ

『あら、春彦先生は詩を書くのはお上手でも、女性へ言葉を贈るのは苦手なのですか』

春彦

「ああ、思い出したっ！愚行の中でも郡を抜いて抹消したい、忌々しい!!ああ何たる拷問だ。今この時喉が焼けても構わない、むしろ酒で焼けてしまえ!!」

春彦

『何を言うんだすみ、僕は浪漫のわかる男だ。でもまあ、君にはまだ早いなア』

すみ

『まあ、私はもう15になりました。縁談も来るような立派な女ですよ』

春彦

『ああ、そうかい。お嬢さんはほんとに色恋の話が好きだなあ』

すみ

『だって気になるもの、作家先生はどう言葉を贈るのかしら』

春彦

『僕は浪漫のわかる男だよ……でもねエおすみ、期待に添えるか分からないよ。僕は好いた人の愛を乞うのに必死でね、僕は詩人だけでもこの時ばかりは言葉を飾る暇は無
いんだ』

すみ

『まあ』

春彦

『初はきつと僕みたいなのより、もつと野郎臭いのが好きなんだ。口が悪くて喧嘩早くて僕は好かない。でも彼奴は、永瀬サンは初と親しいんだ。なんなら僕といる時よりココロ笑う気がする。年上だし、きつと、きつと甲斐性もあつて男前なんだろうねエ。』

(こ)で一気に酒を煽る)……つく。まあ、僕は嫌いだけだな!』

すみ

『先生、落ち着いてくださいな。お酒あまりお強くないでしょう』

春彦

「あーあーあーあーつもうよせよせ、ぐツ、頼むから止まってくれ……もしくはとつとと潰れてしまえ、寝ろ!! だらしくとも情けなくともいい、今すぐに沈んでしまえ!!!」

『あんな雑な言葉を喋る男の何が好いんだ……男らしいかあ……少し真似てみようか。けれども、僕はきたない喋り方はすかん……』

すみ

『先生はそのまま素敵ですよ。奥様だつて充分先生のこと大事にしてらっしゃるじゃありませんか、十分男らしいですよ』

春彦

『……俺、か。なあ、すみ。自分のことを、おれと言うのは男らしく聞こえるのかい。やはり、あいつの口調を真似るのはむりだよ。一人称を変えるのが げんかい だ』

すみ

『良いのではないですか、ええ素敵ですよー』

『（小声で）……はあ。そんなところより、男らしさというのは行動や考え方に宿ると思ふのだけどなあ』

春彦

『そうかい。ウン、そうしよう。初、おはつ、おれは君のことが好きだあ。きみがすきなんだ、きいておくれ』

「わかった、わかったから止まれ！それは家に帰ってから言えばいいだろう！」

すみ

『ふふふ。雛鳥みたいだわ。かわゆいですね。先生。そろそろお勘定にしましょうか』

春彦

『んう？ ウン。くふふ』

『……』

すみ

『ん、なんですか？ 雛鳥さん、なにかお代わり……』

春彦

『好きなんだ』（渾身のイケボをください、生娘が恋に転げ落ちるくらいのの）

すみ

『ひうつ……え、え??』（心臓がはち切れそうになってください。初恋です。戸惑って、心臓痛くて仕方なくなってください）

春彦

『嗚呼、君が欲しいなア』（ドロツと溶けるような低い声で）（ギャップで殺せ）

すみ

『は、はい……わ、わあしでよければ……??』（声を震わせて、無意識に喋った感じ）

春彦

『おれのだ、きみは。おれのがいい、おはつ……ぐう』

すみ

『は、はわ。……わ、私は何を。そんな、はしたない……』

春彦

「……ああ、全ては身から出た錆よ。すみから聞いていたが、改めて一部始終を見ればわかる。俺はただの糞野郎じゃねエか。男であれば弁明の余地などない。記憶にないとどの口がほざいたことか。どの面下げて、俺は初に会うつもりなんだ……」

――間。